な性格をもつ土地利用実態を統一的基準に従って把握した資料は皆無に等しい。それだけに地理学が今後果されなければならない役割は大きいといえよう。

姑　の　死

貝　山　久　子

姑は昭和５０年４月１１日，７５才で亡くなりました。ひそやかな葛藤もなかったと言えば嘘になりますが，概して言えば仲の良い嫁姑で，一つ屋根の下で暮した期間は実の母よりも長く，何よりも私が曲りなりにも仕事を続けられたのは姑に負うところが大きかったわけですから，昨年の発病以来出来るだけの事をし，姑も私を一番頼りにしていたように思います。

姑は丈夫で健啖家でしたが，昨年２月ころ胃の不調を訴え，精密検査の結果胃癌とのことで直ちに入院，胃の$\frac{4}{5}$を切除しました。幸手術は成功し，余後も順調に回復し４月末退院しました。その後徐々に健康をとり戻し，食欲もあり，外出も出来るようになって喜んでいた矢先，今年の２月はじめ急に食欲を失い床に就くことが多くなり，癌性腹膜炎との診断で再入院したのでした。

昨年の姑には，生への執着と病に立ち向う強い姿勢が感ぜられました。７４才で大手術をひかえているのに，まことに元気旺盛であれこれ注文し，身だしなみを気にしました。

ひとさじのいのちを
ベットの上にすくいあげ
ゆれうごくその液体をこぼすまいと
スプーンを握りしめる

〃死から引き返して〃　高村文江詩集より

退院してからも早くもとのようになりたくてよく食べ，時には小さな胃に拒絶反応をおこさせることもあった程でした。それにひきかえて再入院の時は，回復ののぞみのないことは，私共だけの秘密にしていたのに，姑には死を既定のこととして受けとめていたようなふしがありました。食欲もなく髪を梳くことも欲せず，すべてを放棄してただボンヤリと横たわっているだけで，日一日とおとろえていき，病棟前の満開の桜が，折からの春嵐に霏々として舞い散る中を，ひっそりと息を引き取ってしまいました。

生命の灯を消さない為の医師団の努力には全く頭の下る思いがしましたが，それにもまして重要なのは本人の気力のように思います。身近な人の死に直面して，多くの人々の献身を思うとき，人の生命の重大さを痛感し，安易な生き方はすまいと心に誓ったことでした。